

山田詠美『風葬の教室』を読む

藤 田 沙 矢 香

山田詠美の『風葬の教室』は、一九八八年二月に雑誌『文芸』に掲載され、同年に第十七回平林たい子文学賞を受賞した作品である。

新しい学校に転校してきた小学五年生の主人公・本宮杏は、自分の芯を持ち、それを変えようとしない個性的な少女である。そのため、彼女は徐々にクラスの中で目立った存在になる。そこに、吉沢先生という若くて快活な教師が、杏のことを気に入って、他の生徒の前であからさまにひいきをする。恵美子という学級委員は吉沢先生が好きのため、杏の存在を不快に感じはじめる。杏は多くのクラスメイトから陰湿ないじめを受け、自殺を考えるとところまで追いつめられる。しかし、杏は姉の言葉からヒントを得て、いじめてくる相手を「自分の心の中で殺し、それを野ざらしにしておくという方法（風葬）」を考えつき、いじめを克服していくという物語である。

I いじめの構造

まずは、杏の転入した五年三組でのいじめとは、どういう仕組みでこなわれたのかということを分析する。先にも述べたとおり、恵美子という一人の女の子が、杏に不快感を持ちはじめたことから、クラス単位でのいじめが始まった。本来ならば恵美子個人の問題であることが、なぜクラス全体に波紋をよんだのだろうか。杏が五年三組という集団について語っている言葉を取り上げる。

「教室には、いつもある種の宗教がはびこる。私は、何度もくり返してきた転校の中で、それを実感していました」。ここでの〈宗教〉というのは、恵美子を代表にし、彼女の価値観や意志がクラスを動かしている様子を比喻しているのだろう。

「私の可愛いショーツがいくら勝っていると言ったって、私以外の全員が木綿のつかいパンツをはいていたら、私は負けたと同じことなのです。小学生の世界に絶対的な価値など存在しないのです」。この印象的な言葉からは、その〈宗教〉がクラス全体の価値観を支配している様子がうかがえる。深谷純一氏が、「クラスの意志イコール生徒一人一人の意志が形作られているような集団、つまり、自己と他者の欲望を均質化させ、異者を同化させようとする、ある種の宗教が支配する狂気の集団」と捉えているように、恵美子の吉沢先生に対する欲望は、クラス全員の欲望へと均質化したということである。これが五年三組という〈狂気の集団〉でのいじめの構図となっている。

II 大人と子供

次に、二項対立をなすキーワードを提示し、この作品の読みを深めていきたい。

私は人間には大人と子供という分け方があるのだいつも思いま

す。それは、もちろん実際に年齢をとっているかどうかということとは関係がありません。あの人は子供、あの人は大人。私は自分にとって少し簡単すぎると思われる授業の時は、いつも人々を大人と子供に分けて遊んでいました。

杏は日頃から、実年齢に関係なく、周りの人たちを自分の判断基準で「大人」と「子供」に分別している。田中実氏によると、「ここで言う「子供」と「大人」との違いは年齢ではなく、成熟度である。成熟とは、他人の欲望を他人の欲望とし、自分の欲望を自分のそれとすることのできることをいう。成熟した「大人」とは他人と区別できる自分固有の欲望をもち、他人のそれに干渉しない人」であるという。この論に沿って、作中の登場人物を、成熟度という点で「大人」と「子供」に分別してみたい。

まず、杏が「大人」と「子供」のどちらに分類されるかを考える際に、杏の欲望の対象とは何であるかということを検討する必要がある。彼女はアッコと呼ばれる少年の上履きに対して、異常ともいえる興味を示している。

彼の足は大きなあ。私は感じて、訳もなく嬉しくなります。私は、この時、自分が生きていることを久し振りに思い出しました。アッコの上履きは汚れています。先週、持ち帰って洗わなかったのでしょうか。駄目ねえ。私は、そう思い、それに触れたい欲望に駆られました。

杏の、アッコの上履きに「触れたい欲望」というのは、他のクラスメ

イトからしてみればそれは異常であり、共有しえないものである。また、「私は自分がほかの大勢の子供たちと違うことを早くから知りました。自分と他人との区別をあつさりとつけてしまうことを学んだのです」とある。杏は、他の子供と自分は違うのだと自覚しているため、「大人」に分類されるといえるだろう。また、この作品は、物語の全体をとおして、主人公・杏の語りで展開されている。杏の鋭い主観が入ることにより、全体的に彼女がすべての人や物事を見下しているような印象を読者に与えている。

吉沢先生は、「大人」と「子供」のどちらだろうか。杏は、「彼が、私を好きなことは知っていました。彼の私を見る目や、私にかける言葉にかぶさる意図的な甘い覆いだけで十分に私は彼の自分への好意に気付くことが出来ました。(中略)彼は私を好いていることを他のお友だちの前で、あからさまに表現し過ぎました」と語っている。彼は杏に対する好意、つまり自分の欲望を、他人の前で隠すことのできないのである。杏の危惧するのとおり、これが後に発展するいじめの原因となる。五年三組のクラスメイトとともに、吉沢先生も「子供」に分類されるだろう。

アッコについては「他の男の子たちのように、余分にはしゃいだりすることをしないのです。もしも、驚くような事件が教室に起こった場合、その事件と同じ分量だけ驚くのです」と語っている。アッコという少年は、五年三組という集団の中で唯一の「大人」、つまり欲望の均質化に同調しない存在として描かれている。

Ⅲ 動物と人間

「鳥獣戯画という素敵な絵を社会科の教科書で見たことがあります」という冒頭文は、とても印象的であるが、その後に直接繋がる表現が見

つからない。《鳥獣戯画》とはどういう意味をもつのか。

いじめがエスカレートした時に、杏が五年三組のクラスメイトを《獣》に例えた表現がある。

人間が獣の瞳を持った時、そこには道徳も、常識も、感情すら存在しなくなることだけを人が知っているでしょうか。そこにあるのは習性だけです。そして、その習性をまっとうさせるために湧き起こる欲望だけです。

五年三組を《動物》に見立てた一方で、杏は自分が《人間》であるということを、アッコの靴に対する欲望をもって実感した。

欲望。これ以上の人間が生きていることの証しがあるでしょうか。それも食べることにでも、眠ることにでもなく、好きな男の人の靴というささやかなものに対する欲望が、私の胸を詰まらせるなんて。私は自分が、動物ではなく、人間であったのだということを実感していました。

あの冒頭文にある《鳥獣戯画》は、転入してきた杏が教室全体を見わたした際に、自分は《人間》で、クラスメイトたちは《動物》という風景を、比喩的に表現しているといえるだろう。

一般的なこの二つの大きな違いというのは、《人間》には理性が働くが、《動物》は本能のままに動くという特徴が挙げられる。自分の欲望を理性によって抑えられる《大人》は《人間》であり、欲望を抑えることができない《子供》は《動物》のようだと示唆されている。

Ⅳ 自己主張と自己隠蔽

五年三組の中で、成熟度という点においての《大人》というのは、杏とアッコの二人だけということになる。しかし、杏がいじめの標的になってしまい、一方のアッコがいじめに遭わないのはなぜだろうか。ここに、《自己主張》と《自己隠蔽》の対比が読める。

何度も引越しをくり返していたために、私は場所というものに、何のこだわりも持てなくなっていました。(中略)私は、一番、変わらないのが人間の芯だと思っていたので、母や姉があそこの土地は良かった、などと話しているのを聞くと不思議な気持ちになりました。

このような独自の見解をもっているのは、引越しをくり返した杏の個性である。しかし、彼女はクラスメイトからのいじめが始まったとき、次のように語っている。「私は自分が生け贄になりつつあるのを感じています。これこそ、私が危惧していたことなのです。水のような人生。私はそれだけを望んでいたのに」と。杏は、《水のような人生》を望みながらも、一方で《変わらない芯》を主張しており、矛盾が生じている。

田中美氏は、「いじめ」の極限にあつてさえ、杏は吉沢先生の好まれる自分を隠そうとはしなかった。吉沢先生にすら愛されてしまう自分を杏は最後まで許していた。これは強烈なナルシストの自己主張であり、恐らくこれが杏の「芯」なのであろう」と指摘している。(3)《自己主張》することが杏の個性であるが、もし彼女がそれを固持するのならば、《水のような人生》は望めないのではないだろうか。

一方で、五年三組という集団でアッコが生きていけるのは、彼が自分

というものを主張せずに、じっと内に秘めているからである。杏が、「アッコは、私から来たメモを読むと気づかれないように筆入れの中に隠しました。彼から同じような紙切れが返ってくることはありませんでした」、「彼は、泣くことも笑うこともせずに、黙々と自分の消しゴムをカッターナイフで削っていました。大人はばつの悪さを、笑ったりせずにああして誤魔化すものなのだ、と私は、その時学びました」と見ているように、アッコは〈隠す〉ことができる。

杏は「風葬」というやり方を覚え、いじめを克服できたように物語は綴じられる。しかし、今後も彼女なりの〈自分の芯〉を他人に主張していくならば、再び〈狂気の集団〉と対峙せざるをえなくなる時が来るだろうと思う。

注

- (1) 深谷純一「『風葬の教室』(山田詠美)を授業で読む」(『日本文学』一九九三年四月)
- (2) 田中美「フェティシズムの誕生―『風葬の教室』」(『国文学解釈と鑑賞』一九九一年八月)
- (3) (2)に同じ。